くらしの明日

私の社会保障論

# 受けやすい検診の確立を

## 子宮頸がんワクチン被害

大熊 由紀子 国際医療福祉大大学院教授

「大切に育てた娘が、注射で青春も奪われて、痛みにもがいて、どんどんひどくなる。顔を歪めて、呻く娘。ゴメンネと私は言い続けている。あなたを将来ガンにさせたくなかった。その代償があまりにもむごい」

東京都杉並区から「中学入学お祝い」として「子宮頸がんワクチン」接種を知らされ、娘に勧めてしまった母が悔恨の気持ちをこめてつづる「みかりんのささやき」というブログの一節です。

この少女だけではありません。元気そのものだったのに、ある日を境に、陸にあげられたサカナのようにけいれんする、痛みが体のあちこちを移動する。病院を訪ね歩いても「精神的なものでは」といわれて傷つく。そんな経験をした家族たちがインターネットで検索して、このブログにたどりつき、あまりに似た経験に驚き、3月25日に「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」を発足させました。

看病で手いっぱいの家族たちを支えようと、首都圏の市議、区議が支援の会をつくり、日野市議の池田利恵さんが事務局長と連絡先を引き受けました。電話番号（042・594・1337）が公開されると「わが子もそうではないか」と、全国から電話が殺到しています。

「子宮頸がんは死を招いたり、子宮を摘出したりすることになる怖い病気だが、ワクチンで防げるという。5万円と高価だが、期日までに受ければ無料といわれ、それならわが子に受けさせよう、と考えてしまったのです」。こう親たちは嘆きます。

厚生労働省に設けられた専門家の検討会でも先月、2種の子宮頸がんワクチンの副反応が、インフルエンザワクチンの38倍と26倍、重篤な副反応は52倍と24倍にのぼると報告されました。にもかかわらず、このワクチンを国の定期接種とする法が3月末、国会で成立しました。

子宮頸がんは、検診で早期発見すれば命も子宮も失わなくてすみます。ただ、日本のように、男性医師の前で足を広げねばならないことの多い検診法では、女性は検診をためらい、検診率は20%にとどまっています。80%と高い英国では、訓練を受けた看護師が、診療所の普通のベッドの上で実施しています。

このような安全で確実な検診方法を検討することなく、まだ臨床試験段階のものを、十分な説明もなく少女たちに接種するのは中止すべきだと考えます。

このワクチンの公的支援が浮上した時、厚労省の担当官は「長期的な効果や副作用の情報が十分ではない」「効果を過信して子宮がん検診を受けなくなったら大変」と警鐘を鳴らしていました。それが、政治主導と社会的なキャンペーンの中で押し切られたのでした。

### 副作用と薬害の違い

どんな薬にも副作用（副反応）はあるが、効果が不利益を上回り、それに勝るほかの方策がなければ、受け入れて治療や予防に使うことになる。薬害は、利益と不利益を比較する科学的データが曲げられたり、副作用情報が隠されたりした結果、被害が拡大すること。副作用は薬が起こすが、薬害は人が起こす。